

沖縄県在住元保育者にみる「養護性」の形成要因 —子ども時代の生活と他者とのかかわりの考察から—

松本 なるみ*

本稿では、沖縄県の児童養護施設に勤務していた保育者たちを対象として、保育・養護実践の根幹にあると考えられる「養護性」がいかにして形成されてきたのか、対象者の幼少期からの生活と意識を検討し、特に他者とのかかわりとの関連から考察した。まず、幼少期の生活と意識を検討した結果、対象者全員が、幼少期から乳幼児との接触体験をもっており、異年齢の子ども同士のかかわりや近隣の人々による被養護体験が、生活や遊びのなかに豊かにみられた。近隣・地域との関係は、接触性が非常に高く、地域共同体は、緊密で双方向的な関係性をもっており、援助性も高いということが分かった。そのほか、祖先拝など過去や未来とのつながりを大切にする特徴が見られた。次に、「養護性」の形成要因について、Lewis, M. の「ソーシャルネットワーク理論」を援用し、他者とのかかわりに注目して考察した結果、①家族だけではなく地域や家族以外の他者とのかかわりの頻度が高いこと、②自身の家族成員と他者との境界はゆるやかであること、③「養護性」の形成過程においては、必ずしも母子関係のみが重要であるとはいえないこと、④幼少期からの乳幼児との接触体験の豊かさ、以上4点が明らかになった。

Key Words : 養護性, 保育者, 他者とのかかわり, 沖縄

1. はじめに

本研究の目的は、戦後混乱期から本土復帰前後に沖縄県の児童養護施設に勤務していた保育者たちの養護実践の根幹にあると考えられる「養護性」の形成要因について、彼女たちの幼少期からの生活と意識を検討し考察することである。

筆者らは、沖縄県内の保育所や養護施設に勤務していた元保育者を対象として聞き取り調査

* 人間学部人間福祉学科

を2008年から実施してきた。沖縄は太平洋戦争において、日本国内で最大規模の地上戦を体験した。戦後沖縄の養護問題は、敗戦直後は、孤児や保護者の生活苦による養育困難に始まり、昭和30年代に入ると社会問題を反映して、児童の触法行為や非行による問題が増加した。その後昭和40年代は親の精神疾患や疾病・不適切な養育環境による問題が最も多くみられた。これらの問題を抱え、社会的養護を必要とする子どもたちの生活を支えてきたのは、必ずしも十分な制度・社会的援助のない厳しい労働条件下で養護実践に携わってきた保育者たちであった（岩崎・松本，2011）。

敗戦後から本土復帰までの期間を中心とした保育実践について、聞き取り調査の過程で特に感じられたことは、沖縄の元保育者たちがもつ、いわば「包容力」とでもいうような他者に対するかかわり方であった。そして、具体的に他者とのかかわり方について検討していく過程で「養護性」ということばに着目した。「包容力」とでもいうような他者に対するかかわり方は、「養護性」の現れと言えよう。

「養護性」は、小嶋によると「相手の健全な発達を促進するために用いられる共感性と技能」と定義されている（小嶋，1989：189）。発達心理学の領域において、「養護性」とは、養育者（特に母親）の子どもに対する態度・行動の違いを記述するために多く使われた概念であったが、「養護性」は大人だけがもつのではなく、幼児期から発達させていくものであり、隣家の赤ちゃんの泣き声を聞いて「どうして泣いているのだろう」と気遣う幼児や、疲れた母親の顔を見て「お母さん大丈夫」と気遣う小学生など、これらも「養護性」の現れであり、小嶋は、子ども時代からの多様な経験を通して形成されていくものであることを示唆している（小嶋，1989，2001）。Alan, D. Fogel, & Gail, F. Melsonpp（1989）は、子どもの「養護性」についての研究において、子どもが乳児に対して示す思いやりや興味、世話をする技術に注目したが、これらの気持ちや技術は、子どもたちの親や、友だち、ペットに対してもみられることを挙げ、「養護性」とは、いくつもの異なる対象に適用できる人間の能力であるという見解を示している。また、男女ともに養護能力は備わっているが、社会の力が子どもの養護対象の選択において強い影響を及ぼしていることについて言及している。そのほか、大学生を対象とした研究をみると、糊澤・福元・岩立（2009）らは、過去の非養護体験と養護体験が「養護性」の形成に及ぼす影響について調査している。その結果、「養護性」の形成には、親だけではなく、きょうだい、教師との関わりや、ペットの飼育なども影響を与えていることを挙げている。

「養護性」の形成過程は、幼児期から養護的な相互作用を再現し、その経験を通して自分の内面に養護する役割を形成していくと考えられている（小嶋，1989）。そこで、元保育者の幼少期からの生活について聞き取ることは、「養護性」の形成過程を知る手立てとなるであろう。

II. 「養護性」

1. 「養護性」の定義と概念

本研究では、小嶋の「相手の健全な発達を促進するために用いられる共感性と技能」, 「相手を慈しみ育む心と技能」(小嶋, 1989:189) という定義を用いる。「養護性」は、養護的な「構え」と「技能」との両方を含んだ概念である。養護的な「構え」とは、対象へのプラスの関心・感情・慈しみ育てようとする動機であり、養護的構えがあるかどうかということは大切な条件といえる。例えば、ペットを世話する「技能」が備わっていても、親に叱られることを恐れてペットの世話をするのは、これは「養護性」の現れとはいえない、「構え」があつてこそ「養護性」と言えるのである。

2. 利他性との違い

困っている相手への援助、相手への慰め、物の配分において相手に有利になるように分けるなどの、自分を犠牲にして他者のためになることをする利他的行動は、「養護性」と概念的に重なる点もある。しかし、「養護性」は、相手の利益よりも相手が育つことを最終目標にしていることから、自分と相手の利益の対立がない。利他性が自己犠牲と表裏一体であるのに対して、「養護性」は、相手へのプラスの関心・情操と素朴な共感性が基礎となり、相手の育ちに関心をもち寄与できることがそのまま自分の喜びとなるという点において、利他性とは同じ概念とはいえない(小嶋, 1989)。

3. 「養護性」の形成過程と他者との養護的相互作用

愛着理論に加えて、親を含む周りの大人や、きょうだいなどから世話をしてもらい、一緒に遊ぶ経験と同時に、他者が世話をしてもらっている姿をみるという経験をする。そして、その経験を今度は自分自身が身近な周りにいるモデルを模倣し人形の世話や、ぬいぐるみをかかわがる立場となってやってみるのである。それは、世話をする主体の立場と、世話をしてもらう対象の両方の立場を経験することになる。つまり立場の共存と交代がみられ、他者との相互作用のなかで「養護性」は形成されていくと考えられる(小嶋, 2001:156)。

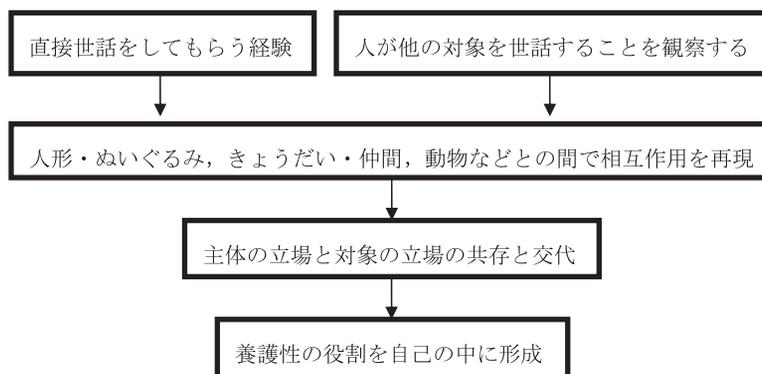


図1. 養護性の形成過程

小嶋秀夫（2001）, 『心の育ちと文化』, 有斐閣, p.156.より筆者が作成

Ⅲ. 保育者の「養護性」に関するインタビュー調査

1. 分析の対象と方法

「養護性」の形成要因として、先行研究より他者との養護的相互作用が影響を与えていることが理解できた。元保育者たちの「養護性」も、子ども時代からの長い経験を通して形成されたものと考えられる。そこで、対象者の幼少期からの生活や経験の聞き取りを通して、彼女たちが生活の中で、「誰と」「どのように」かかわっていたのか、どのような相互作用が認められるのかを明らかにする。

対象者ひとりあたり二時間程度の半構造化インタビューを実施した。時期は、2009年11月、2010年11月～12月の2回で、調査対象者は、沖縄県在住の元保育者10人（全員女性。児童養護施設保育士9人、児童養護施設と保育所に勤務した保育士1人）であった。10人中4人は2回の聞き取り調査を実施することができなかったことから、今回の分析対象は、2回聞き取りを実施できたAさん(60代後半)、Bさん(60代後半)、Cさん(60代後半)、Dさん(70代前半)、Eさん(70代前半)、Fさん(70代前半)、の6人（平均年齢70歳）に限定した。

インタビュー調査は、対象者に倫理的な配慮について説明し、許可を得てICレコーダーに録音し、逐語録を作成して分析した。

質問内容は、Ⅰ. 家族について Ⅱ. 子ども時代について Ⅲ. 沖縄の地域性、戦争について Ⅳ. 元保育者の現在について、の4つのカテゴリーに関する項目で構成した。

本稿では、質問Ⅰ. 家族について、Ⅱ. 子ども時代について、の2つの項目に関するインタビューから得られたデータを中心に、まず、元保育者たちの家族について、子ども時代の生活と経験について検討した。次に、影響を受けた人や、他者とのかかわりを分析視点として、Lewisの「ソーシャルネットワーク理論」(マイケル・ルイス, 2007) に注目した。

2. ソーシャルネットワーク理論

ソーシャルネットワーク理論とは、子どもの対人関係の発達においては、母親との関係だけではなく、複数の人々との関係も重要であり、複数の他者との関係が同時並行的に形成されているという考え方である。

本稿では、Lewisの作成した、「ソーシャル・ネットワークマトリックス」(Lewis, M.2005 : 13) を援用し、元保育者たちが、だれと、どのようにかかわる体験をしたのかを読み取り、表を作成し分析・考察を加えた。

IV. 結果と考察

1. 子ども時代の生活と経験

①家族、きょうだい数と出生順位

対象者のきょうだい数の平均は5.83人である。平均年齢70歳である彼女たちの生まれ年はおよそ1940年前後であるため、厚生白書によってその年の一世帯当たりの子どもの数を調べてみると、全国平均は4.27人であった（厚生白書平成10年版1998）。彼女たちのきょうだい数は、平均と比べて高い数字である。同居家族の人数は、きょうだい数に親、祖父母、叔母、長男の配偶者と子、などが含まれるが、家族構成員は対象者によって異なる。Dさんの場合は、戦後2年間は、祖父母に両親、きょうだい、きょうだいの家族、というように、合計19人が同居していた時期もあった。

表1. きょうだい数と出生順位

対象者	Aさん	Bさん	Cさん	Dさん	Eさん	Fさん
家族人数 (同居)	8人	7人	5人	12人	10人	8人
きょうだい	6人	5人	3人	8人	8人	5人
出生順位	長子	末子	中間子	末子	末子	中間子

②家族内で影響を与えた人物

家族内で影響を与えた人として、「貧しい生活のなかでも勤勉で子どもと遊んでくれた父」や、「家族の中心であったしっかり者の母」があげられた。きょうだいのなかでは、「情熱をもって理想を語る兄」や、「海外移民として外国で暮らし働く兄」など、また親族では、「多忙な生活のなかでも読書によって広い視野をもつ叔母」、「海外移民で成功した向学心のある伯父」や、「海外移民から帰国した華やかな親戚の女性」など、当時の沖縄では、移民が盛んであったこととの関連も見られた。そのほか、Eさんは「母は忙しく家にいなかった。特に家族ではない」と語り、戦後の捕虜収容所時代から参加していたバイブルクラスで出会った人々を挙げている。

表2. 家族内で影響を与えた人

Aさん	Bさん	Cさん	Dさん	Eさん	Fさん
読書好きで 視野が広く 進学を応援 してくれた 叔母	・ハワイに移 民した向学 心のある伯 父 ・品があり、 かわいがっ てくれた母	・貧しい生活 の中でも働 き者で、遊ん でくれた父	・働き者の 母 ・海外移民 として外国 で暮らし働 く兄 ・沖縄復興 は教育から という情熱 をもつ兄	・家族内には いない （バイブル クラスで出 会った教会 の人々）	・地域への奉 仕貢献の精神 をもつ母 ・実の子のよ うにかわいが り育ててくれ た近所のSさ ん家族

③乳幼児との接触体験

元保育者全員が、学童期から何らかの乳幼児との接触体験をもっていた。長子と中間子は弟妹の世話を、末子は姪や甥の子守をしており、遊ぶときには、友だちの幼いきょうだいも一緒に世話をしながらのことも多かった。

B「友だちの妹、弟とかです。赤ちゃんをおぶったまま遊んでいました。交代ごうたいで、結構そういう妹・弟が多い人は、学校におぶってきたりとかね、泣いたりぐずったりすると、先生と一緒に外に出たり、また、おうちに帰ったりと…」

C「学校の先生のおうちでね、子守だったもんですから大変でした。— 略 — おんぶして遊ぶと、邪魔ですよ。ゴム飛びってわかります？あれなんかやるときは飛べませんか？子守みんな集まって遊ぶから、子守じゃない子は2～3名いるんだけど、その子たちとゴムをつかまえるときに、この人におんぶさせて、おんぶも今考えるとぞっとするんですよ。ただくびって、2つ、帯でよ。今考えたら危険よ」

D「遊びとかってというのは、おんぶして、缶けりとかお手玉遊び、はないちもんめ。— 略 — みんなそういう時代ですから。学校にもおんぶして行ったことがあります」

このように、幼児期から乳児を背負い遊ぶこともそれほど珍しいことではなかった。

子ども同士も工夫しながら遊ぶようにお互いに協力して小さい子どもの面倒をみるなど、異年齢の子ども同士のかかわりが、日々の生活や遊びの中に豊かにみられたといえる。

全員が子守を経験しており、年下の子どもを世話するという経験は、「養護性」の技能的側面を育んだと考えられる。

2. 近隣・地域との関係

①近隣・地域の人々との関係

近隣・地域の人々との関係についてみると、Cさんは次のように語っている。

「金は援助ができないから、金以外のことは何でも、そこの台所のどこにみそがあって、塩があってというのもみんな分かって、行ったらすぐそこで自分が料理できるくらい隣近所のお付き合いはありました」

その関係性は、隣家の台所の調味料置き場まで熟知している、他家でおやつや夕食をごちそうになり、そのまま風呂も済ませて自宅に戻るなど、日常生活におけるかかわりの深さがうかがえた。しかし、その空間性は限定的で、交通手段が少なかったことも関係すると考えられるが、同部落内、近隣の地域に限られていた。

この地域共同体は、非常に緊密で双方向的な関係性をもっており、冠婚葬祭などは、親族のみならず、近隣地域の人々が総出で食事の準備や来客のもてなしなどを手伝っていたことも語られていた。つまり、地域における援助性は高く、余裕のある家庭は貧しい家庭に食料を補助するなど、助け合って生きていく姿が浮かび上がってきた。

Lewisは、乳児の社会化について、「乳児はいくつもの異なるネットワークの中に生まれ、その中で発達し、社会化される」(マイケル・ルイス 2007:7) と述べている。社会化には、直接情報を与えたり交換するものと、モデルとなるもの、子どもが模倣や参考にするような間接的なものがあるとしているが、「養護性」の形成過程も共通する部分があると考えられる。つまり、家族だけではない、さまざまな社会的機能(役割)をもつ他者とのかかわりのなかで「養護性」は育まれていくのであろう。

表3. 近隣・地域の人々との関係

関係性	高い(隣家の台所の調味料置き場を知っている)
接触性	高い(他家でのおやつ、夕食は日常的)
空間性	限定的(部落内)
共同性	緊密、双方向的(冠婚葬祭)
援助性	高い(農作業「結」、金銭的協力「模合」)

農作業においても、さとうきびの収穫などは多くの人手を必要としたことから、各農家がお互いに手伝いながら作業を行っていた。これは「結」または「ゆいまーる」という沖縄独特のことばで表されている。本土の者からみると、この「ゆいまーる」ということばは、沖縄の助け合いの精神の象徴のように感じるが、インタビューでは、貧しい状況のなかで生きてゆくための知恵であり手段であったと説明された。

②地域における養護体験と被養護体験

隣家での養育や、知人の家で実子のようにかわいがられるのは珍しいことではなかったようで、特に沖縄の離島では、そのような子育てが頻繁にみられたことがFさんの聞き取りから得られた。

「妹は隣に子どもがいないおうちがあって、おじさんおばさんもいっぱいいて、姪や甥もいて、そこのおばあちゃんが、子守り手伝いしましょうと赤ちゃん（妹）を連れていって、授乳して寝かせて。あとは弟が生まれたら、もうこの子（妹）はここで寝かせておくっていったね、ずっと隣のうちであの子（妹）は（育てられた）、親戚じゃないけど、すぐ隣の」

「私はまた面白いよ。うちの叔父のお友達のおうちがあったの。Sさんという。そこに私を、2、3歳のころから、片手で抱いて遊びに行っていたんだって。そこのお母さんと娘さんたちに私はまたかわいがってもらって、何かあると向こう（S家）に行くんですよ」

また血縁関係のない年長の青年を男性は「ニイニ」、女性を「ネエネ」と親しみをこめて呼び、地域の祭りや行事をとおして、年長の若者たちから踊りや地域の芸能、進路や社会生活について学ぶ機会があり、憧れの対象として影響を受けることもあった。

③信仰（宗教）と行事

信仰（宗教）と行事については、祖先拝など過去や未来とのつながりを大切にしている特徴が見られた。特に、祖先供養や農業に関する行事についての語りが印象的であった。シーミー（清明祭）と呼ばれる行事は、墓に一族が集まり持ち寄った酒や料理を楽しむピクニックのような感覚で行われる。このように親族が一堂に会する経験から、祖先拝など過去や未来とのつながりを大切にするのが一般的で、いま自分がここにいるのは、祖先のおかげであり、感謝して生きるのだと対象者たちは語っていた。

対象者たちは幼児期から祖先供養や行事に親族や地域の人びとと参加して先祖へ感謝をしつつ、自然への畏怖の念を身につけていったということである。これらの経験は、共同体的な相互扶助観とともに、死生観や他者とのつながりを内面化する契機となったといえるだろう。

④沖縄社会の影響

社会の影響についてみると、自分自身の生き方や保育の仕事への影響の度合いの認識は人によって異なるが、地上戦のなかで死を覚悟したこと、敗戦後の捕虜収容所での経験や海外移民への憧れ、祖国復帰運動への参加など、沖縄県特有の歴史・社会的影響を受けたと考えられる側面がみられた。

3. 他者とのかわり

元保育者たちが、子ども時代を回想し、だれと（対象となる人々）、どのように（役割）かかわっていたのかインタビューを実施した。Lewis, M. の対人関係のモデル「ソーシャルネットワークマトリックス」(Lewis, M. 2005: 13) を援用し沖縄の元保育者たちのソーシャルネットワークの表を作成した。縦軸は対象（人々）を、横軸は社会的機能（役割）を示している。縦軸の社会的機能（役割）①保護②世話③養護性④遊び⑤学習のそれぞれの定義は以下に示した通

りである.

- 「保護」 — 危険回避, 守る
- 「世話」 — 食事, 着替え
- 「養護性」 — 養護的な構え (対象へのプラスの関心・感情, 対象を慈しみ育てる動機, 言葉による愛情表現・非言語的な優しさの表現 (情動行動))
- 「遊び」 — 日常の子どもの遊びと地域の行事の遊び
- 「学習」 — 年長者の行為・役割の観察, 模倣

表4. 沖縄の元保育者たちのソーシャルネットワーク

ソーシャル・ネットワークの構成員	社会的機能/対象者 (ABCDEF)																													
	保護					世話					養護性					遊び					学習									
	A	B	C	D	E	A	B	C	D	E	A	B	C	D	E	A	B	C	D	E	A	B	C	D	E					
本人																														
母		●	●		●					●						●	●													●
父	●																													●
姉																														
兄			●							●																				●
妹																														
弟																														
祖母																														
祖父																														
親戚		●																												
おば																														●
おじ																														●
いとこ																														
姪																														
甥																														
隣家の人々					●					●																				●
地域の人々					●																									●
教師																														
友だち																														
友だちのきょうだい																														

●他者からの行為 ○本人の行為

Lewis, M (2005 : 13) The social network matrix of social network members and functions を参考に筆者が作成

表の●印の分布からわかるように、対象者は、いずれも家族だけではなく地域や家族以外の他者とのかかわりの頻度も高いことが明らかである。社会的機能（役割）の項目ごとにみていくと、まず、「保護」に関しては、父・母・兄といった血縁・同居家族とのかかわりが多い。しかし、食事や着替えなど日常生活における「世話」に関しては、必ずしも血縁・同居家族に限られているわけではない。IV-2-①で述べたように、家族以外の他者が一緒に食事をすることも多く、幼少期から自身の家族成員と他者との境界のあいまいさや、閉鎖的ではない関係性が、養護性の形成における要因のひとつとして考えられる。それは、成人し保育者になった後のインタビューにおいて、「夫（婚約者）が職場に来て子どもたちと遊ぶ」「自宅に退所児が家族を連れて遊びに来る」「自分の子どもと入所児と一緒に遊ばせる」「金銭的援助をする」など、自分自身の家族と担当児童とが区別なく継続的なかかわりを持っていることが頻りに語られていた

ことから理解できる。また、同じ「世話」の項目にみられる○印は対象者本人の行為、つまり「世話」をした経験を示しているわけだが、全員が、きょうだい・甥や姪・友だちのきょうだいなど、なんらかの異年齢の子どもとの接触体験が豊富であったことを物語っており、子育ての担い手は、家族のみに限定されず隣家や地域も含まれているということが理解できる。

「養護性」の項目をみってみると、自分を最もかわいがってくれた人として、父親や兄など、男性の家族や地域の人を挙げる者もみられ、いずれの対象者も自身の母親について、仕事や家事といった生活に追われて多忙であり、ゆっくりとかかわったという意識は低いことが語られていた。これは、社会的機能（役割）が、特定の家族の一人に集中することなく、それぞれの役割をもつ複数の他者とのかかわりのなかで成立していたことを示している。沖縄県在住の元保育者たちの「養護性」の形成過程においては、必ずしも幼少期の母子関係のみが重要であるとはいえないことが示唆された。

「遊び」や「学習」においては、地域の人々、友だち、教師など、家族以外の他者とのかかわりが顕著である。家族のみならず、地域の人々とのかかわる経験が、「養護性」の「構え」と「技能」の習得に影響を与えていると考えられる。

V. おわりに

本稿では、沖縄県の児童養護施設に勤務していた保育者たちを対象として、保育・養護実践の根幹にあると考えられる「養護性」がいかにして形成されてきたのか検討してきた。まず、幼少期からの乳幼児との接触体験や異年齢の子ども同士のかかわりが生活や遊びのなかに豊かにみられ、養護的行動をなし得る「技能」の習得との関連が理解できた。

次に、近隣・地域との関係性から、日常生活において、家族だけではなく、地域や家族以外の他者とのかかわりの頻度が高いこと、自身の家族成員と他者との境界はゆるやかであることが明らかになった。また、家族関係の特徴として、今回の調査結果からは、必ずしも母子関係のみが重要であるとはいえないことが示唆された。今回の調査は地域や対象者の人数に限られていることから、保育者の「養護性」の形成要因の全体像を示したとはいえないが、家族のみではなく複数の他者とのかかわりを通して「養護性」が育まれていくと考えられる根拠は得られたのではないだろうか。

今後は、以上の要因が地域性や時代的背景によるものなのかどうかの検証や、地域・世代・職種間の比較研究を行なう予定である。

引用文献

Alan, D. Fogel,・Gail, F.Melson (1989). 子どもの養護性の発達, 小嶋秀夫編, 乳幼児の社会的世界, 有斐閣, 170-186.

岩崎美智子・松本なるみ(2001). 戦後沖縄における養護児童の生活と保母たちの養護実践—資料と語りからの考察—, 東京家政大学人間文化研究所紀要第5集

- 厚生省 (1998). 少子社会を考えるー子どもを産み育てることに「夢」を持てる社会をー, 厚生白書 平成10年版, 第1編第1部1章ー6.
- 小嶋秀夫 (1989). 乳幼児の社会的世界, 有斐閣, 189.
- 小嶋秀夫 (2001). 心の育ちと文化, 有斐閣, 156.
- 榎澤令子・福元真由美・岩立志津夫 (2009). 大学生における過去の被養護・養護体験が現在の養護性(nurturance)へ及ぼす影響, 教育心理学研究 57(2), 168-179.
- Lewis, M. (2005). "The Child and Its Family :The Social Network Model " Human Development 48, 8-27.
- マイケル・ルイス (2007). 子どもと家族ーソーシャルネットワーク・モデルー, マイケル・ルイス/高橋恵子 (編) 愛着からソーシャル・ネットワークへ, 新曜社, 16-20.

参考文献

- 川上清文 (1989). 乳児期の対人関係, 川島書店
- 箕浦康子 (1990). 文化のなかの子ども, 東京大学出版会
- 中西雪夫・牧野カツコ (1989). 高校生の「親になることの準備状態」と保育教育ー「準備状態」の形成に影響を与える要因ー, 日本家庭教育学会誌 32
- 根ヶ山光一・柏木恵子 (2010). ヒトの子育ての進化と文化ーアロマザリングの役割を考えるー, 有斐閣
- 琉球政府 (1972). 沖縄県史第22巻各論編10, 民俗I, 琉球政府
- 山本 正子・小林 厚子 (2009). 乳幼児とのふれあい体験学習に関する研究ー中学生のナーチュランスと信頼感に及ぼす影響, 東京成徳大学臨床心理学研究 (9), 105-112.

謝辞

インタビュー調査に快くご協力いただきました沖縄在住の元保育者の先生方に心よりお礼を申し上げます。研究代表者である岩崎美智子教授 (東京家政大学) には、豊富なインタビュー調査の経験からの確なご指導とご助言を賜り、面接調査で収集した調査資料も提供していただきました。深く感謝申し上げます。

付記

*本研究は、科学研究費補助金の助成を受けて行われたものの一部である。(基盤研究 (C) 「戦後日本における保育者のライフヒストリーに関する研究」 課題番号20530748 研究代表者: 岩崎美智子)

(2011.10.5 受稿, 2011.10.20 受理)